

金陵の囿（韋莊）

江雨 霏霏として 江草 齊し

六朝 夢の 如く 烏 空しく 啼く

無情は 最も 是れ 台城の 柳

旧に 依つて 煙は 籠む 十里の 隄

江雨霏霏江草齊 六朝如夢鳥空啼
無情最是臺城柳 體舊煙籠十里隄

解説 金陵の鄒の台城あとの絵を見て六朝の衰亡を悼んだ詩。

語釈 ※金陵Ⅱ今の南京。＊江雨Ⅱ長江に降る雨。

※霏霏Ⅱ雨や雪などが細かく降り続くさま。

※六朝Ⅱ呉、東晋、宋、齊、梁・陳の六代をいう。

※台城Ⅱ宮城。六朝時代、天子の御所を「台」といったのでこの々いがある。※依旧Ⅱ昔のまま。※煙Ⅱもや。春がすみ。柳の芽ふいたさまをたとえた。

通釈 長江に、春雨は霏霏として降りしきり、川辺の草は一面に平らかに茂っている。六朝時代の榮華は夢のように消え去って、ただ小鳥が聞く人もいないのに啼いているだけである。いちばん無情を感じさせるのはこの台城の柳である。この柳は王朝の交替をよそに、今も昔のままに芽をふいて、十里の長い堤の上を春雨にけぶって立っている。